

京都大学北海道演習林標茶区の淡水魚類相 (予報)

二村一男・谷口直文

I はじめに

京都大学北海道演習林標茶区は、面積 1,447ha で、かつて道東の根釧原野がミズナラ、ヤチダモ、ハルニレ、キハダ、ヤマザクラなどの落葉広葉樹林におおわれていた面影をとどめている森林である。

近年、森林の公益的機能、とりわけ水質浄化、水源かん養などに関心が高まっているが、釧路近郊で行われた植樹祭では、森林管理署が一般市民に「水辺林をつくろう」と呼びかけ、ハルニレ、ヤチダモ、シラカンバなどの広葉樹が植栽された。釧路支庁でも「釧路川に河畔林をつくろう」と同様に広葉樹が植栽された。漁民の参加も多く「海と森のつながりを大切に」をスローガンに森林に対する関心の高さがうかがえる。森林が水の浄化に大きな効果をあげた事例として根釧西部森林管理署管内の標茶森林事務所（旧称：パイロットフォレスト）が造成した 1 万 ha におよぶカラマツ林があげられ、この森林を源流とする別寒辺牛川は厚岸湾にそそぎ、養殖カキに好ましい水環境を作り出しているといわれている。

根釧原野にまとまった森林として島状に残る標茶区は環境林としての役割も大きい。標茶区の動物相に関しては、これまでに京都大学北海道演習林の鳥類相⁴⁾、鳥類相の季節変化⁵⁾、野生哺乳類の目撃記録⁶⁾などの報告があり、これらの動物にとっても標茶区の森林は、生息・繁殖・休息地として重要であるといえる。そこで標茶区において「森林と渓流水」に関わりの深い淡水魚の実態を調査した。標茶町の淡水魚については、針生⁷⁾による詳しい調査報告がある。しかし標茶区についてはまだ調べられていない。かつて生息していた種も含めた標茶区の淡水魚類相を記録しておくことは今後の試験研究の貴重な資料となると考えられる。

報告に際して、ご教示いただいた釧路市立博物館館長補佐で学芸員の針生勤博士、釧路市在住で元演習林職員の菅原哲二氏、白糠区の柳直文技官には貴重な情報を提供していただいた。厚くお礼申し上げます。

II 調査地及び調査方法

標茶区は、釧路湿原国立公園の北東部にあり、地形は緩やかで起伏の少ない丘陵からなり、標高は 50 ~ 140m である。林相は、約 30 % がカラマツ、トドマツ、アカエゾマツとストロブマツ、チョウセンゴウなどの外国産マツの人工林で、残りの天然林はミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ、キハダ、センノキ、ケヤマハンノキ、シラカンバなどを主林木とする落葉広葉樹林からなる。地形区分を大別すれば、面積の大半を占める起伏の少ない台地と、太平洋にそそぐ釧路川水系多和川の支流の南タワ川とイソチンベツ川などの谷筋にある湿地に分けられる（図-1）。

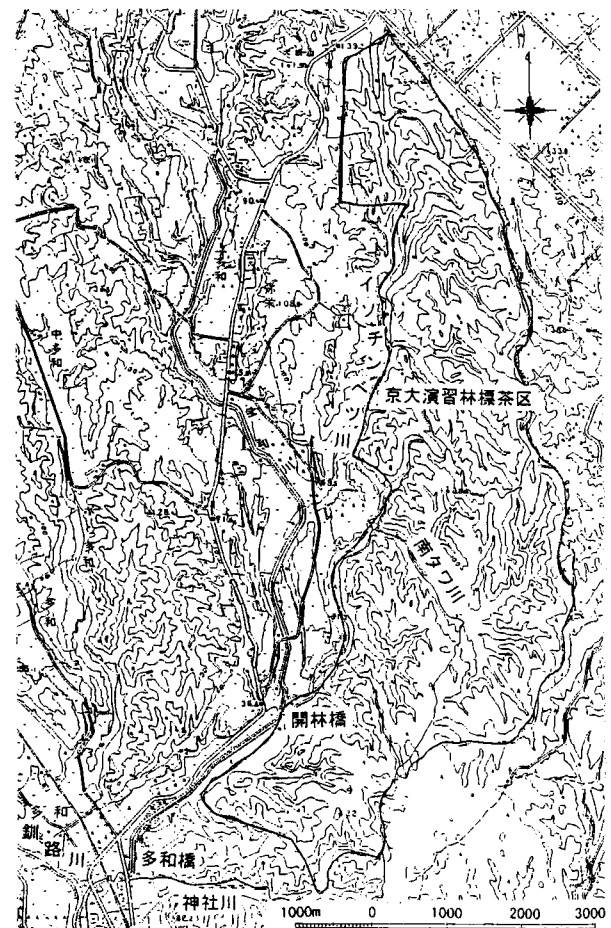


図-1 北海道演習林標茶区林内図

NIMURA, Kazuo · TANIGUCHI, Naofumi

Fish fauna in Shibeicha, Hokkaido

キーワード：北海道，標茶区，魚類相

Key words : Hokkaido, Shibeicha division, Fish fauna

低地の湿地林は、ヤチダモ、ハルニレ、ハンノキ、ヤナギ類を主林木に、ハシドイ、ホザキシモツケなどの低木が群落をなし、林床には大型草本のアキタブキ、ヨブスマソウ、ハンゴンソウ、バイケイソウ、イラクサなどが生い茂り、湿地には谷地坊主(ヒラギシスゲ)が群生しているところが多く、明るい水辺にはパイカモが見られる。

調査方法は、生息確認調査と個体数調査からなる。生息確認調査は、1983年と1998年8月から2001年8月までの観察記録からなり、それ以前の生息状況については、標茶区に長年勤務した菅原哲二氏⁷⁾への聞き取り調査(1999年4月)に基づく。個体数調査は、生息密度を把握する目的で、2000年8月18日にイソチンベツ川中流部の約300mの区間で実施した。捕獲は網による追い込み法で行い、捕獲した全個体の種名を調べ全長を計測した。

なお、魚類目録の和名・学名・配列順は宮地²⁾ほかによった。

淡水魚類目録

ヤツメウナギ目 *Petromyzonida*

ヤツメウナギ科 *Petromyzonidae*

ヤツメウナギ属 (*Entosphenus*)

スナヤツメ *Entosphenus reissneri* (DYBOWSKI)

林内のかなり上流にまで生息し、30年前はごく普通に生息していたが現在ではあまり個体数は多くない⁷⁾。1983年6月に11林班の谷川の浅瀬で20数匹がかたまっている様子が観察された。菅原は、釧路川でスナヤツメを「はえ縄」の餌としてイトウやアメマスを獲得したという⁷⁾。

サケ亜目 *Salmonidma*

サケ科 *Salmonidae*

サケ属 (*Oncorhynchus*)

サケ *Oncorhynchus keta* (WALBAUM)

シロザケともいわれ、北海道庁は「サケ・マス人工ふ化事業」として北海道の主要な河川の水産資源の確保をめざしている。現在では天然産卵の河川はごくわずかであろう。釧路川では河口から8.2kmのところに捕獲場があり「止め」(ウライともいう)と呼ばれる捕獲柵を設け一網打尽する。予定数量が獲れ、「止め」が解放されると50数km上流の多和川付近まで遡上することがある。1998年10月29日～11月2日にかけて事務所近くの多和川で40～50cm程度の数尾からなるサケの群れを観察した。背ビレや尾ビレは白くボロボロになり動きもにぶい。やがてこれらは力つきて死ぬ。これらは「ほっちゃれ」と呼ばれ、ヒグマ、キタキツネ、シマフクロウなどの餌になっている。昔

から多和川に遡上するサケは多和橋から上流には遡上せず、ここから分岐した神社川を遡上するといわれてきた。このことについては定かでないが、水質の影響と川底が産卵条件に適しているためといわれている。

サクラマス *Oncorhynchus masou f. masou* (BREVOORT)

ヤマメの遡河型はサクラマスと呼ばれ、1998年9月14日に南タワ川の川幅70cm程度、水深20cm程度の砂地で体長40cm程度のサクラマスが観察された。また、この地点より上流でもサクラマスのヒグマによるものとみられる食べ残しが観察された。北海道では太平洋側よりも日本海側に多く分布するといわれ、日本以外ではカムチャツカ半島、アムール地方、朝鮮半島に分布する¹⁾。

ヤマメ *Oncorhynchus masou f. ishikawai* (JORDAN et MCGREGOR)

この地方でヤマメの名で親しまれている。林内にはごく普通に生息する。ヤマメは一生を淡水域で過ごす河川残留型でほとんどが雄で大部分の雌は川を下りサクラマスになる¹⁾。

アメマス *Salvelinus leucomaenis leucomaenis* (PALLAS)

生活史のちがいで遡河型をアメマス、河川残留型をエゾイワナと呼んでいる¹⁾。林内ではヤマメと同様にごく普通に見られる。谷筋によってはヤマメよりアメマスの方が多い。1950年6月下旬には多和川河口付近で体長40cm程度のアメマスがよく釣れた⁷⁾。当時は釧路川や多和川の水量も多く水質も良かったという⁷⁾。1984年に胃袋から取り出した昆虫類を調べたところクロヒラタシデムシ、カタクリハムシ、ドロハマキチョッキリ、トビケラの幼虫、ムネアカオオアリなど15種におよび、食性は豊富であった⁹⁾。ほとんど地上または樹上にいる虫であり落下してきたものを餌として食べたものであろう。川の両岸にある低木から供給された重要な餌資源といえよう。1965年10月に川幅1m程度の谷川で黒ずんだ40～45cm程度の卵を抱いたアメマスの個体が多く獲れた⁷⁾。今でもこの谷川を「アメマスの谷」と呼んでいる。

イトウ属 (*Hucho*)

イトウ *Hucho perryi* (BREVOORT)

イトウは、サケの仲間ですべて1mにもおよぶ日本最大の淡水魚である。産卵した後でも15～20年以上も生き続けるといわれている¹⁾。20数年前には多和川で70cm程度の個体が釣れた⁷⁾。かつて町内のシラルトロ湖で体長2mにもおよぶ大物が獲れたという。

食性は成長とともに変化し、体長 30 cm 以上になるとスナヤツメ、フクドジョウ、イバラトミヨなどを食べ、さらに大きくなるとネズミ、カエル、ヘビなどを捕食するという¹⁾。イトウ釣りで有名な釧路川では、30 cm 程度の個体も希になり「幻の魚」となってしまった。

コイ目 Cyprinida

ウグイ亜科 Leuciscinae

ウグイ属 (*Tribolodon*)ウグイ *Tribolodon hakonensis* (CUNTHER)

釧路川にはごく普通に生息しているが、多和川では開林橋まで生息している。1995 年 6 月に柳が開林橋で捕獲した。淡水域で過ごす淡水型と海で生活して遡上する遡河型がいる²⁾。

アブラハヤ属 (*Aoroco*)ヤチウグイ *Moroco percnurus* (PALLAS)

ヤチウグイは、湿地にすむウグイに似た魚で、ウグイの仲間ではなく、アブラハヤの仲間である³⁾。1970 年代の多和川にはごく普通に見られたが、現在では生息していない⁴⁾。

ドジョウ科 Cobitidae

ドジョウ属 (*Misgurnus*)フクドジョウ *Barbatula toni toni* (DYBOWSKI)

ヤチウグイと同様に 1970 年代の多和川にはごく普通に見られたが、現在では生息していない⁵⁾。

トゲウオ目 Gasterosteida

トゲウオ科 Gasterosteidae

イトヨ属 (*Gasterosteus*)イトヨ *Gasterosteus aculeatus aculeatus* (LINNAEUS)

1945 年頃には林内の小さな谷川に多く生息していたが次第に少なくなり⁶⁾、現在では見かけない。

カジカ目 Cottida

カジカ亜目 Cottina

カジカ科 Coitidae

カジカ属 (*Cottus*)ハナカジカ *Cottus pollux* CUNTHER

釧路湿原に流れ込む河川の上・中流域に広く分布する北方系の魚である⁷⁾。林内では南タワ川、イソチンベツ川で 2~3 cm 程度の個体が捕獲できる。

表-1 捕獲魚類個体数

調査地:イソチンベツ川(11林班)			
調査年月日:2000.8.18 天候:曇り			
調査延長:約300m川幅:1.5~2.0m			
種名	体長 (mm)	個体数 尾	備考
アメマス	180	1	
	160	1	
	140	4	
	130	5	
	120	5	
	110	6	
	100	4	
	90	3	
	80	2	
	70	1	
	60	3	
	50	2	
	40	2	
	30	2	
計		41	
ヤマメ	200	1	婚姻色
	160	1	婚姻色
	90	2	
	80	4	
	70	7	
	60	5	
	40	1	
計		21	
ハナカジカ	15	1	
計		1	
合計		63	

III 調査結果及びまとめ

標茶区内と隣接地の多和川でこれまで確認されたものと現在も生息している種も含めて、6科11種の淡水魚が記録できた。本調査で確認できた種はスナヤツメ、サケ、サクラマス、ヤマメ、アメマス、ウグイ、ハナカジカの7種で、イトウ、ヤチウグイ、フクドジョウ、イトヨの4種は最近では見られなくなった。種数の減少として考えられる原因のひとつに蛇行した多和川の改修があげられる。しかし近年、堤防の一部ではヤナギ類が繁茂し河畔林を形成してきたところもあり、さらに1998年には北海道庁による落差堰の魚道の改修によって今後は遡上する魚類も期待される。

引用文献

著者らは最近釧路地方で希少種として注目されているニホンザリガニ *Cambaroides Japonicus* (DE HAAN)を 1979 年に 2 林班の小さな遊水池で 10 数匹確認した。

イソチンベツ川の水深 10~50 cm 程度, 延長約 300m 区間で捕獲した個体数調査結果を表-1 にまとめた。個体数はヤマメ 21 尾, アメマス 41 尾, ハナカジカ 1 尾, 合計 63 尾で, このうちヤマメ 2 尾は婚姻色であった。おおよその生息密度は谷川延長 100 m 当たり 20 尾程度で, なかには一つの淀みで 6 尾も捕獲できたところもあり, かなり魚影の濃い水域といえよう。

今後調査回数を重ね, さらに流域環境(林相)の異なる谷川の調査を行う必要がある。

- 1) 針生勤(1998)標茶町の自然(4) 標茶町の淡水魚. 釧路短期大学生涯教育センター. 標茶町教育委員会. 釧路. pp52
- 2) 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦(1974)原色日本淡水魚類図鑑改訂版. 保育社. 東京. pp278
- 3) 二村一男(1984)京都大学北海道演習林におけるフクロウ, クマゲラならびにアメマスの摂食物について. 釧路市立博物館々報. 287. 101-104
- 4) ——(1987)北海道演習林の鳥類相. 京大演集報. 17. 1-13
- 5) ——(1988)北海道演習林における鳥類相の季節変化. 京大演集報. 18. 1-13
- 6) ——(2001)京都大学北海道演習林における野生哺乳類の目撃記録. 京大演試験研究年報. 1999. 9-20
- 7) 菅原哲二(1999)私言